

実践と研究を編む

(3) 教育臨床社会学におけるアプローチ

前回の「(2)教育臨床社会学が対象とする場所や空間」で紹介したように、教育臨床社会学では、対象とすべきフィールドを「ミクロ(教室や学校全体など)」「メゾ(教育実践を経営・管理する学校、学校を統括する地方教育行政など)」「マクロ(国家教育行政、支配的教育言説など)」の3つのレベルで整理しています。

多様な実践性への要請をふまえて、研究者はさまざまなフィールドと関わり、実践者とのコミュニケーションを図っていくことが期待されています。いずれのレベルにおいても、その現場の多くは、官僚制(専門化・階級化された職務体系、明確な権限の委任、文書による事務処理、規則による職務の配分といった諸原則を特色とする組織・管理の体系)や支配的教育言説に枠づけられており、それをふまえたコミュニケーションが求められます。

研究者が「どこまで現場に対して伝えるべきか」「具体的な提案をどの範囲で検討すべきか」などはその状況にもよりますが、各レベルのフィールドに対して、以下のような立場でのアプローチが提案されています(清水 1997, 酒井 2014 ほか参照)。

・ミクロレベル: <書記>として

教師や子どもたちが抱える困難を「受容的に」理解することが求められます。研究者が現場に参入する際には「(教育の)専門家」という役割が期待されますが、現場の主体性を尊重しつつ、努めて書記(実践者に寄り添い、彼らの代理人として実践の現場を記述、分析、整理する役割)に徹するなど、受容的に関わるのが重要です。

・メゾレベル: <提案者>として

現場でのフィールドワークや資料分析により、課題を究明し、その要因を探り、より積極的に課題の改善に向けた提案を行うことが求められます。研究者は現場の論理や現場の考え方を尊重しつつ、管理職や地方教育行政担当者との「対話」に重きを置くことが重要です。

・マクロレベル: <批評家>として

現行の法制度や教育施策、国家教育行政、背後にある支配的な教育言説に対して、「複眼的に」評することが求められます。その際には、批判的な視点も含めることが重要です。

【引用・参考文献】

- ・酒井朗(2014)『教育臨床社会学の可能性』勁草書房.
- ・清水哲郎(1997)『医療現場に臨む哲学』勁草書房.

(日本大学文理学部教育学科 望月由起)